修士論文（要旨）
2021 年 1 月

集団への関わり方とひとりの過ごし方が大学生活の充実感に与える影響

指導　池田　美樹　准教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
219J4009
八木　聖子

Master's Thesis(Abstract)
January 2021

Relationship between participation group activities and spending time alone: perspective of effect on the quality of University life

Seiko Yagi
219J4009
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

目次

1. 問題と目的 1
2. 方法 1
3. 結果 2
4. 考察 2

参考文献

1. 問題と目的

大学生は、集団に関わりながら、自己を形成する時期のため、三者以上の他者と過ごす時間とひとりの時間のバランス、すなわち集団と個のバランスが重要とされている（増渕,2014）。

集団に所属する理由は、自分にしかできない役割があることで、集団から認められていると感じることがわかっている（岡崎・中村,2019）。このような所属集団への期待は、集団への関わり方に影響を与える可能性がある。

橋本ら（2010）は、三次元組織コミットメントに基づいて、サークルコミットメントの規定要因が情緒的コミットメント、規範的コミットメント、集団同一視コミットメントであることを明らかにした。情緒的コミットメント、規範的コミットメント、集団同一視コミットメントは、成員間の人間関係に影響を受けることがわかっており、「居場所」と関連すると考えられる。

則定（2008）は、居場所を「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場があるという感情」と定義している。このことから居場所は、成員間の関係性の影響を受け、集団への関わりを強化する役割を担っていると考えられる。

谷渕（2015）の研究から、居場所のある場で、他者とのつながりを感じることで、ひとりで過ごす時に自分らしく居られ、大学への適応感を高めることがわかっており、所属する集団があることで、ひとりで過ごす時、充実感を得て、大学生活の充実感が高まると予測される。

大学生は、集団と個のバランスが重要視されているが、集団と個がどのように関係して、大学生活の充実感を高めているかについては明らかになっていない。そこで、本研究では、第一に、重要な所属集団あり、所属集団なしによる、ひとりの過ごし方下位因子と大学生活の充実感を比較検討することを目的とする。第二に、仮説モデルを検証し、コミットメント下位因子と所属集団の居場所感下位因子、ひとりの過ごし方下位因子が大学生活の充実感に与える影響を検討することを目的とする。

2. 方法

・調査対象者

大学生、大学院生を対象として、以下の質問紙構成からなる Web 調査を実施した。回収されたデータ数は、161 名（男性 50 名、女性 111 名）であり、不適切な回答を除いた分析対象者は、148 名（有効回答率：92.02%；男性 46 名、女性 102 名）で、平均年齢 20.52±2.00 歳であった。

・質問紙の構成

⑴　重要な所属集団の有無

所属集団として、サークル、部活、ボランティア、アルバイト、ゼミ、その他、所属なしを挙げ、複数回答を求めた。また、「その他」と回答した場合は、所属集団の具体名の記述を求めた。「所属なし」以外を選択した者は、「重要な所属集団を 1 つ」選択することを求め、重要な所属集団の具体名の記述を求めた。その上で、⑵重要な所属集団への参加に関わる項目、および⑶～⑺への回答を求めた。「所属なし」と回答した者は、⑸、⑹、⑺への回答のみ求めた。

⑵　重要な所属集団への参加に関わる項目

重要な所属集団への参加に関わる項目として、「参加頻度」、「所属期間」、「活動の有無」を挙げ、回答を求めた。

⑶　所属集団の居場所感：居場所感尺度（岡本・口田, 2013）5 件法 26 項目

⑷　コミットメント：サークルコミットメント尺度（橋本・唐沢・磯崎, 2010）12 項目 7 件法

⑸　ひとりの過ごし方：ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度（増渕, 2014）26 項目 6 件法
⑹　大学生活の充実感：大学生活充実感尺度短縮版（SoULS-21）（奥田・川上・坂田他, 2010）21 項目 5 件法
⑺　人口統計的変数（性別、年齢、学年）の回答を求めた。

3. 結果

重要な所属集団のあり、所属集団なしによる比較

148 名（あり 135 名、なし 13 名）を対象とし、「ひとりの過ごし方」４因子、「大学生活の充実感」に差が見られるか検討した結果、「重要な所属集団あり」の方が「所属集団なし」より「孤絶願望感」（t (145)=2.74, p <.01）が低く、「大学生活の充実感」（t (145)=2.56, p <.05）が高かった。

各因子の関係

「重要な所属集団あり」135 名を対象とし、大学生活の充実感を従属変数、所属集団の居場所感下位因子、コミットメント下位因子、ひとりの過ごし方下位因子を独立変数として、重回帰分析を用いて、仮説モデルを検証した結果、Fig. 1 のモデルが示された。

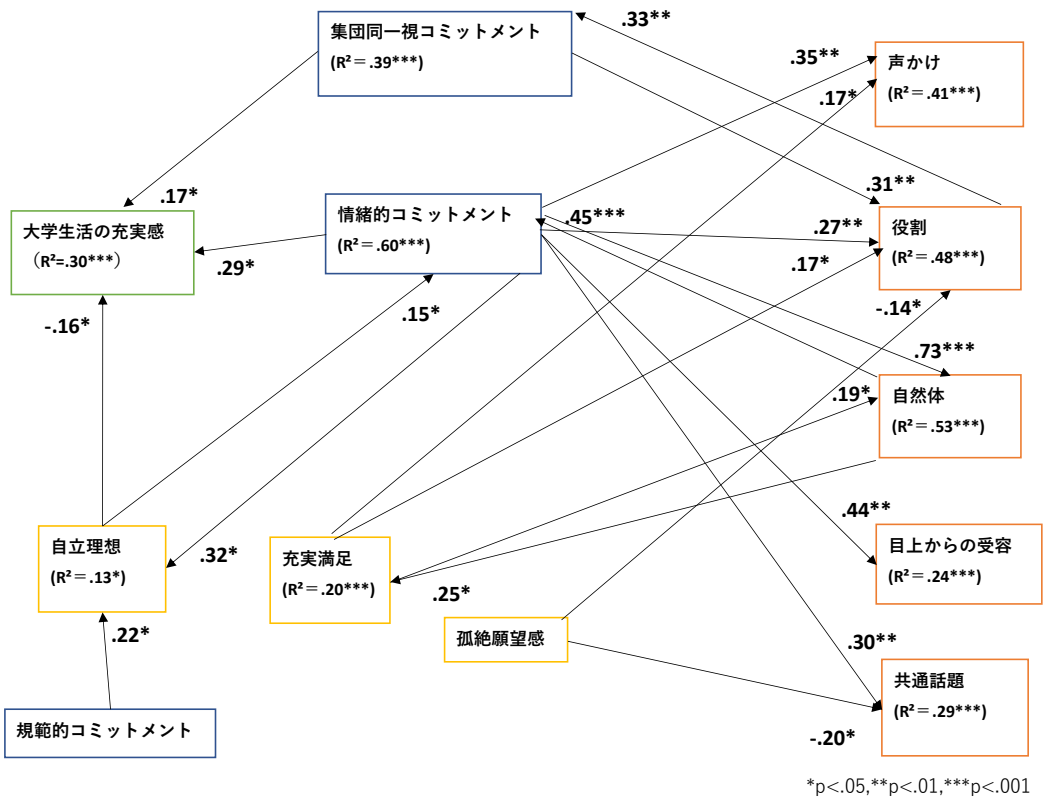

Fig.1 コミットメント、所属集団の居場所感、ひとりの過ごし方、大学生活の充実感の関係性を重回帰分析で調べた結果
（有意ではないパスは省略）

4. 考察

本研究結果から、「所属集団なし」は、「重要な所属集団あり」に比べて、「孤絶願望感」が高く、「大学生活の充実感」が低かった。このことは、「所属集団なし」（13 名）の内訳が、大学１年生（12 名）、大学２年生（1 名）であったことが関係していると考えられる。新型コロナウイルスの影響を受け、全面オンライン授業になり、大学１年生は、想定してい

た大学生活と異なるキャンパライフを送ることになった。そのため、従来に比べ、大学生活の充実感は低下していたと考えられる。また、自粛を余儀なくされたこともあり、「孤絶願望感」が高まった可能性がある。対面での授業が再開された場合、結果が変わる可能性がある。

本研究の結果から、Fig.1 に示すように、コミットメント、所属集団の居場所感、ひとりの過ごし方、大学生活の充実感の関連は、「充実・満足」→「声かけ・役割・自然体」→「集団同一視コミットメント・情緒的コミットメント」→「大学生活の充実感」という流れになっていることが明らかになった。

以上の結果から、ひとりで過ごす時に充実感を得ている者は、「声かけ・役割・自然体」といった所属集団の居場所感を感じ、その集団に「情緒的コミットメント」もしくは「集団同一視コミットメント」することによって「大学生活の充実感」が得られていることが明らかになった。このことから、集団と個のバランスを取るためには、「声かけ・役割・自然体」の所属集団の居場所感が得られ、その所属集団に「情緒的コミットメント」、もしくは「集団同一視コミットメント」する必要があることが明らかになった。

分析結果から、「充実満足」が「声かけ」、「役割」、「自然体」に正の影響を及ぼしていることが明らかになり、所属集団の居場所感とひとりで過ごし方と関連が見られたが、所属集団の居場所感が大学生活の充実感に直接影響を及ぼしているとは言えず、所属集団の居場所感と大学生活の充実感の間には、コミットメントが関わっていた。つまり、所属集団に居場所感を感じ、大学生活の充実感が高まるのではなく、所属集団に居場所感を感じ、コミットメントすることによって、大学生活の充実感が高まるといえる。

本研究の限界点として、「重要な所属集団」に関して、回答者の捉え方に違いが見られたことがあげられる。具体的には、本調査の結果、「重要な所属集団」で、活動できている人は８割であり、活動できていることが、「重要な所属集団」の選択理由であった可能性がある。また、本研究の期間、新型コロナウィルスの影響で、大学の授業はほぼオンラインで実施されていたこと、及び所属集団での活動が制限されていた時期があることから、「大学生活の充実感」に影響を及ぼし、特異的な結果である可能性がある。

参考文献

橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年（2010). 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討実験社会心理学研究 *50*,（1), 76-88

増渕裕子（2014). 大学生における「ひとりの時間」の検討および自我同一性との関連　青年心理学研究 *25*, 106-123

則定百合子（2008). 青年期における心理的居場所感の発達的変化 カウンセリング研究 *41*（1), 64-72

岡崎直哉・中村俊哉（2019). 居場所喪失の経験と目撃が居場所形成に及ぼす影響 ―居場所とは何か，居場所尺度作成の試み―福岡教育大学紀要，第 68 号，第 4 分冊，33-41

奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久間裕子（2010). 大学生活充実感に関する研究（1）:―4 年度分の調査データに基づく大学生活充実度尺度の短縮版の作成― 日本心理学会大会発表論文集 *74*, (0), 2AM057-2AM057

岡本卓也・口田江里（2013). 「居場所感」尺度の作成 感情心理学研究 *21* (Supplement), 37-37

谷淵真也（2015). 大学生の居場所感と学校適応感の関連 比治山大学紀要 (22), 65-73